

住民主体で福祉のまちづくりを推進する情報交流紙です

よつ葉のクローバー KIKUSUI

No.47 2011.7.1



福まち通信

菊水福祉のまち推進センター運営委員会
札幌市白石区菊水6条4丁目3-10
電話 011-887-7006 FAX011-887-7006
URL <http://kikusui-net.jp>



北海道神宮祭・みこし菊水を巡行

YOSAKOI ソーラン祭りが終わり、ライラックの香りとともに夏の風物詩北海道神宮例大祭(札幌まつり)がやってきました。6月16日は、そのビックイベントである「みこし渡御」が行われ、今年の祭りを取り仕切る「年番」の菊水祭典区の要望を受けて、132回目で初めて順路を大幅に変更しました。

当日は晴天に恵まれ、ダイエー東札幌店を午前9時45分に出発したみこしは、時代装束姿の氏子ら約1400人を引き連れて、沿道に詰め掛けた大勢の市民の前をしずしずと進みました。それに続く山車8基は賑やかな祭りのときめきを振りまいて、12時前に一条大橋を渡っていきました。



菊水地区を災害救助の空白地域にさせないために

平成23年3月11日午後2時46分東北地方沿岸部を襲ったマグネチュード9震度7以上の大震災は、その後襲ってきた大津波を加えて、死者15,000人行方不明9,000人以上という大惨事を引き起こしました。あの日から3ヶ月以上経っていますが、依然として9万人以上が避難生活を続けています。

東日本大震災から学ぶ

想定外の大地震であったことが被害を大きくした原因であったといわれていますが、岩手県のすべての保育所では、日頃の避難訓練の成果により一人の幼児の犠牲者も出さなかったといわれています。その反面、宮城県石巻市の大川小学校では児童生徒の避難誘導が遅れて、全校児童の大部分が津波に吞まれました。

道新夕刊のコラム(右側)に、宮城県栗原市の防災対策の成果により、今回の地震での死者が一人も出なかったことが報じられています。過去の災害経験から市が防災対策の強化に乗り出したこと、その結果、住民の防災



意識が格段に向上したことなどが挙げられ、これが犠牲者ゼロの背景になったといわれています。

これらは地震に対する日頃の備えが、いかに大切かを示す事例であり、これらから学ぶことの必要性を端的に表しています。

札幌市の地域防災対策は？

札幌市では、市民の生命・財産を災害から守るため「地域防災計画」を策定し、市民や事業所の役割、また、北海道・道警・自衛隊などの災害関係機関や、電気・ガス・電話などのライフライン企業、さらに他の自治体との連携によって、災害に強いまちづくりをすすめ、大災害にも対応する防災体制の確立を目指しています。

担当部局である危機管理対策室では、関連する部局との連携による各種の防災事業を行っていますが、とりわけ町内会組織による「自主防災組織」の育成に力を注いでいるところだと聞いています。



過去の災害からの教訓

16年前、神戸市を襲った「阪神淡路大震災」は、大都市で起こった災害として私たちが大いに参考にすべきものです。あの時の死者6,443人のうち9割は瞬間圧死でした。この点から住宅の耐震化が急がれます。164,000人が家屋崩壊などで閉じ込められ、自力で脱出できた人を除く35,000人が閉じ込められたままでした。その人たちの約8割を救出したのは付近住民の人たちの力によるものでした。また、逃げ遅れた人たちの大半が高齢者や障がい者であったことから「自主防災組織」の育成が急務であるとされていますし、避難支援を必要とする対象者の把握がなされていないことが災害対策の反省材料として残りました。

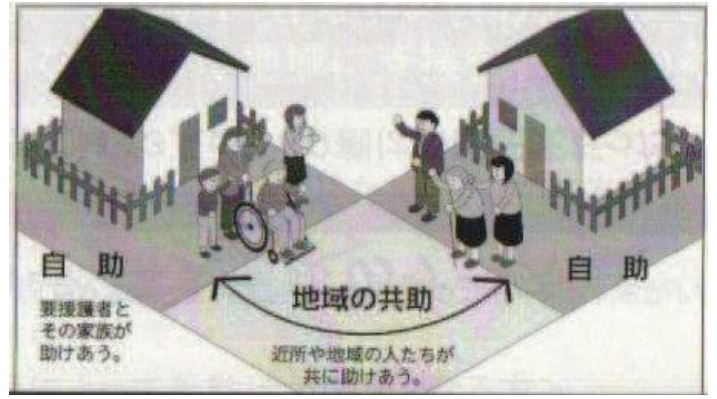


市民防災センター 白石区南郷通6丁目北

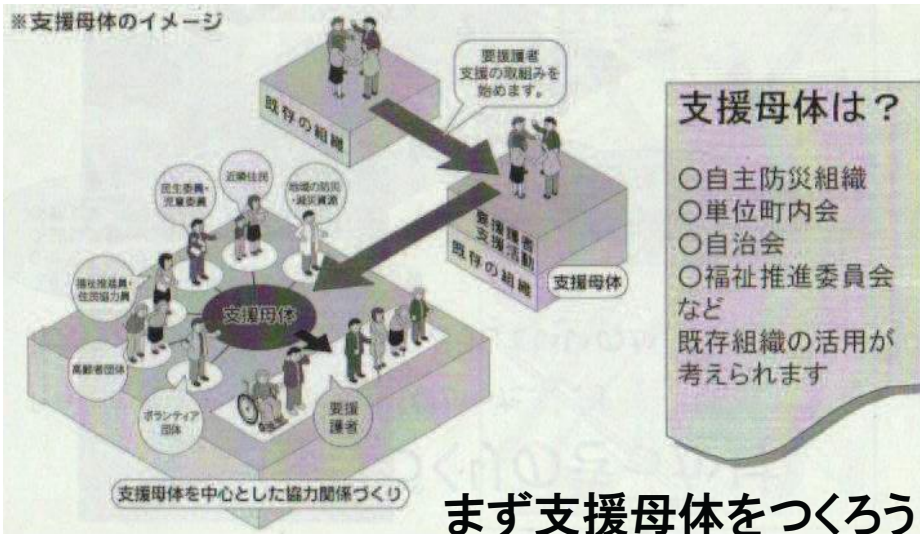
災害時要援護者避難支援ガイドライン

「阪神淡路大震災」や「新潟県中越地震」など過去の大災害を参考に、一人で避難することが困難な人や、緊急時に逃げ遅れる恐れのある人たちの手助けをするガイドライン「札幌市災害時要援護者避難支援ガイドライン」が作られています。

地震など一刻を争うときには行政の支援は間に合いません。身近にいるものが助けるのが過去の災害の教訓として明らかです。このことから、日頃から災害に備えておくことや、災害時には家族や隣近所の人との支援を受け易くしておくことが必要です。そのために何をどのように準備しておくことが必要かを示したものです。



※支援母体のイメージ



災害時要援護者

災害時に自力や家族の力だけでは避難できないため、地域に支援を求める人

支援母体

地域の「自主防災組織」、「単位町内会」、「福祉推進委員会」をはじめ、マンション等の「自治会」

支援員

要援護者への災害情報や避難誘導を実際に行う人。災害時に支援母体と共に支援を確実にを行うための要となる人

まず支援母体をつくろう

北白石地区での取り組み

白石区では前記ガイドラインの制定を機に、北白石地区をモデル地区と定めて「災害時要援護者避難支援事業」の推進を行いました。町内会が実施主体となり民生・児童委員協議会など各種関係団体の協力の下に、平成 20・21 年の 2 年間で独居高齢者等を対象とした避難支援体制を既に確立しています。平成 22 年 3 月末登録数は次のとおりです。

要援護者登録数 389 人 支援者登録数 192 人

菊水地区での取り組みの現状

菊水地区では平成 21・22 年に一人暮らし高齢者に「救急医療情報キット」の配布事業を行いました。このキットは、高齢者が家で急病や怪我で倒れたときに、救急隊員に医療情報を正確に知らせる手段として使われるもので、「災害時要援護者避難支援ガイドライン」による支援母体作りのきっかけとして利用してもらおうと、市が希望地区に無償で配布しているものです。

この事業推進の結果、地区内の一人暮らし高齢者の状況を把握することができました。その結果が、呼びかけ・見守り活動につながっていくことと期待されています。

地域住民からの問題提起

災害時要援護者避難支援対象者は一人暮らしの高齢者だけではありません。寝たきりや認知症の高齢者で家族の力だけでは避難すること

救急医療情報キット



が困難な人も対象になるでしょうし、心身に障がいのある人や、状況によっては妊産婦や幼児・児童なども対象になるでしょう。

3月11日の大震災の数日後、菊水地区にお住まいの障害を持つ一人の女性から、避難支援についての問い合わせが福祉のまち推進センターにありました。彼女は脳性小児麻痺のため手足が不自由で車椅子の生活を続けています。マンションの6階でホームヘルパーの介護を受けながら自立一人暮らしをしている女性です。彼女の考えを原稿にまとめてもらいました。

避難支援体制の確立に向けて

まず、単位町内会などによる支援母体を立ち上げる必要があります。そのため、それを支援する連合町内会やまちづくりネットワーク会議を通じて、民生児童委員協議会、福祉のまち推進センターなどの関係諸団体の連携の強化が待たれるところです。

次に、要援護者の情報の収集が急務となります。高齢者の情報は前記したようにキットの配布で概ね把握することができましたが、心身障がい者の情報の収集はすこぶる困難が伴います。情報収集方法は「**手上げ方式**」と「**同意方式**」によると、ガイドラインで示されていますが、回覧板等で避難支援希望者を募集するとしても、町内会加入率が5割そこそこでは周知徹底は難しいといわねばなりません。高齢者情報は行政からの情報提供により民生委員の手にあるとしても、心身障がい者の状況把握はつかみ切れていないのが現状です。

行政でも心身障がい者の情報の把握が困難と聞いていますが、それなら要援護者避難支援の趣旨を全市向けの広報手段で周知

し、自主的に支援母体に「手上げ方式」により支援希望の申し出を行うよう促すなどの措置をとってはいかがでしょうか。ガイドラインを示すのみで、住民に障がい者の情報把握を丸投げしただけではないかと非難される前にご一考を促したいと思えます。札幌市身体障害者福祉協会では、神戸の震災後会員の個人情報約2千人分を、3、4年に一度各地の民生児童委員会を通じて地域に提供していますが、これが提供の趣旨に沿って活用されていないのが残念です。

自力で避難できないことの不安を出発点に行動

登り口 倫子

「明日はわが身に起こるかもしれない」
2011年3月11日の東日本大震災の被害をテレビで見ていると、「今までのように安易に安心してはならない」と思うようになりました。



私は、身体障害があり日常生活に介助が必要なため、ホームヘルパーを利用してマンションで一人暮らしをしています。しかし、24時間いるわけではないことや、大震災になれば一人のヘルパーだけでは避難できず、自分の身を守れないといった問題があります。これを機に、まずは菊水まちづくりセンターへ連絡したところ、南地区連合町内会や民生委員の方々につないでいただき、私の存在や状況をご近所に知ってもらうことから始めました。

ただ、本当に大きな力を必要とする時は、若い方の手助けが必要になります。例えば、私は歩けないため車いすを利用しており、エレベーターが止まった場合は抱えてもらわなくてはなりません。ヘルパーが万が一怪我をした場合、私だけでなくヘルパーにも助けが必要です。避難する時だけでなく、避難所生活でも設備にバリアが多いほど介助が要ります。

今回の震災で私が感じたことは、「いくら健康であっても、震災によって生活の基盤は崩れたり、身体を損傷したりし、生きることに困難を抱えてしまう」ことです。もちろん、高齢者や障害者、妊婦や幼い子ども等には多くの支援が必要です。しかし、震災における避難の問題は、誰もが共通して認識することが大事だと思います。

そして、いざという時に互いに助け合える関係作りが重要です。私は、近所同士のお付き合いにわずらわしさを感じる人でしたが、自分が持っている不安を出発点に、菊水地区で抱えている避難の問題について取り組んでいきたいと考えています。

東日本の被災地への支援に加え、それぞれが自分の地域の人たちの支援について考えられるようになれば、いつ起こるかわからない災害にも立ち向かえると思います。

編集後記

札幌祭りのみこしが、今年は菊水を起点として厳かに巡行されました。北海道の守り神として鎮守され、お蔭で札幌市は大きな自然災害に遭遇することが少なく、安全な都市であると考えられています。しかし、市の周辺にはいくつかの活断層が存在し、ついこの間の6月21日午後7時頃に、去年の12月2日の地震と同じ震源で起こった小規模な地震を感じています。一層気を引き締めて、防災対策の見直しを行う必要があるのではないのでしょうか。
(枝元編集員)